

# デュッセルドルフ日本人学校における算数科の指導について

前デュッセルドルフ日本人学校 教諭

熊本県菊池郡菊陽町立菊陽中学校 教諭 梅野 秀行

キーワード：学力格差、習熟度別少人数コース、学びの喜び

## 1. はじめに

長年の夢が叶って在外教育施設で教鞭をとる機会を頂いた。日本で20年以上も中学校英語教員として実践してきた私にとって小学部で教えるということは初めての経験であったが、同僚のアドバイスや家族の支えにより3年間、無事に指導できたことは人生の中で大きな糧になった。ここに、その取り組みの一部を紹介したい。

## 2. デュッセルドルフ日本人学校の特徴

- (1) 本校は、ドイツのノルトラインヴェストファーレン州の州都として、ドイツの北西に位置している。日本企業がたくさん進出していて、約7500人の日本人が生活をしている。その中でデュッセルドルフ日本人学校の児童生徒数は、小学部と中学部を合わせると約500人になり、欧州一の規模を誇っているが、近年は児童数が徐々に減少してきている。
- (2) 保護者の教育的要望が高く、授業参観後のアンケートには、「英語やドイツ語をレベルアップして欲しい」という声や「宿題の量を増やして欲しい」等の声も多く聞かれる。
- (3) 国際理解教育に力を入れていて、小学部の1年生からカリキュラムの中にドイツ語が週に2時間組み込まれている。また、各学年でスポーツの交流や文化発表会の交流などを行っている。教員も授業交流として、現地の学校の授業を見学させてもらったり、ボンやケルンなどの日本人学校の補習校とも交流を行い、お互いの授業力向上に努めている。
- (4) 平成28年度は、算数科と理科に力を入れることを目標として、小学部の高学年（5、6年生）と低学年に算数のT・T（ティームティーチング）の為の教員配置と、理科専科の教員を配置する取り組みを行った。

## 3. 児童の実態について

2年目から3年目にかけては、希望が叶って、学年の児童達をもち上げることができ、5年生を受け持つようになった。メリットもあればデメリットもあったが、子ども達を昨年から知っているというメリットを生かしたいと考えていた。本校の児童の特徴として以下の特徴が挙げられる。

- (1) 塾や習い事に通う児童が多く、学力が極めて高い児童が多い。一方でクラスには、国際結婚等の家庭の事情があり、家庭では日本語に触れる機会が少ない児童や漢字に苦手意識をもっている児童が数名いる。
- (2) 算数に苦手意識を持っている児童が数名いる。算数の授業では、教え合い学習を行ったが、苦手意識を持っている児童の手がなかなか挙がらない。
- (3) 転出・転入の児童数が多く、1年間で3分の1程度は入れ替わる。

これらの実態から上記の(1)と(3)の特徴を考慮して、算数の苦手な児童の底上げを図る指導と、得意な児童のレベルを上げる指導を両立させるために少人数コースを設立することを学年で共通理解を図った。

#### 4. コースの決め方

本校の5年生は、1クラス35人前後、2クラスで約70名の児童がいた。担任2人とT・T配置の教員の合計3名で学年2クラスを横割りにしてレベル順に「ぐんぐんコース」、「のびのびコース」、「じっくりコース」の3つに分けた。事前に希望調査を行い本人の希望を最優先したが、これまでの算数の成績や授業態度等も考慮して割り振りを行った。一番苦手な児童が集まる「じっくりコース」は、12名でスタートした。

#### 5. 学習指導要領の評価の位置づけ

学習指導要領では、第5学年の目標として「異なった2つの量の割合でとらえられる数量を比べるとき、3つ以上のものを比べたり、いつでも比べられるようにしたりするためには、単分量あたりの大きさを用いて比べることができるようにすることをねらいとしている」と書かれている。そのようなねらいを踏まえて、2つの量のどちらを基準に考えると比べやすいかということに気づかせるために最初の導入段階で数直線を用いて丁寧に説明をすることを共通理解として確認した。また、導入時と授業を進める際に、考え方がどう変わったかなどの変化を見るために、ノートチェックなども共通して行うことを取り決めた。

#### 6. 取り組みの実際

「単分量あたりの大きさ」と「割合」の2つの単元で行った。基本的には3コースとも教科書を中心にすすめるが、「ぐんぐんコース」は、発展問題を中心に行い、「じっくりコース」は、児童が分からない所に時間をかけて指導を行う方針でスタートした。評価のテストをいつ実施するのか決めることや評価をする際の材料は、ノート指導、計算カードのチェック、テストの評価の3本柱で行うことを確認した。

#### 7. 成果と課題について

##### (1) 成果について

①「じっくりコース」や「のびのびコース」に共通していたのは、全体での授業と大きく異なり、なかなか手が挙がらなかった児童の手が少人数コースになったことで次々に挙がるようになったことである。「前に出て問題を解く人？」と尋ねると「ハイッ」と指先まで伸ばして「あててください!」と目力で訴える顔は忘れられない。

また、わからない問題に直面したときに、「わかりません」と恥ずかしがらずに手を挙げるので、どこで躓いているのかすぐわかった。人数が少ないので児童も集中しやすいし、全員に目が届いていた。

②「ぐんぐんコース」では、算数が得意な子どもが集まっているので進度が速く、発展問題に多く取り組むことができた。他の人を待つ必要がないので、自分のスピードに応じてプリント等の練習問題を解くことができモチベーションを維持することができた。

##### (2) 課題について

①「ぐんぐんコース」では、等質グループで学習の広がりが少ないので、学び合いの場などを設定することが必要になってくる。

②3コースに分けるということは、3パターンの評価の方法が生じることになるので、教師間の細かい打ち合わせが必要になる。

③ 普段、受け持っていない子ども(隣のクラス)を教えることにもなるので、どういう言葉かけや指導が適切か、児童観や指導観の把握が難しい。

以上のような成果や課題が挙げられる。今回、初めてこういった少人数コースによる授業を行ってみたが、算数が苦手な子どもが「私、この(少人数)クラスだったら手を挙げられるのになあ」「先生、次の単元も少人数がいいです」と声をかけてくれたことは、とても嬉しかったし、私たちの取り組みが間違っていなかったと励みにもなった。ここでの取り組みは、日本に帰ってから生かしていきたいと思う。